Kahuzi Biega National Park
POPOF
established 1992

ポポフニュース

No.26
2019 年 7 月号

ポポフ（POPOF）はポレポレ基金（Pole Pole Foundation）の略称で、1992 年にコンゴ民主共和国で設立された NGO（非政府・非営利団体）です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと願っています。

ゴリラを初めてみた高校生たちとともに

コミュニティ・ツーリズムに託す希望

ジョン・カヘークワ

コンゴ民主共和国の政治情勢が不穏で、治安が悪いために、カフジ・ビエガ国立公園にも観光客がめったにやってきません。絵葉書や民芸品なども売る相手がいなくなって、生産できなくなっています。そこで、ポポフは海外の観光客から地元の人々に対象を移し、コミュニティ・ツーリズムに力を注ぐことにしました。

ポポフの職員のダニー（中央）が保護区で不法行為をしている人々を問いただす

以前から、地元の高校生や女性を中心に野生のゴリラを見せて、ゴリラの生態や歴史を学ぶ事業を実施していましたが、今年からはその対象を拡大し、頻繁に行うようにしました。また、単にゴリラの通った跡を追ってゴリラに出会うだけでなく、人々がゴリラの生存を脅かしている現場を見せることにしました。

最近、公園では不法に牛や山羊を放牧することが急増しています。公園周辺は人口が過密になり、畑が増えてもう家畜に食べさせる草がなくなりました。そこで、人々はまだ緑が豊富な公園の保護区内に家畜を入れ、草を食べさせて歩くようになったのです。しかし、草は家畜ばかりでなく、ゾウ、バッファロー、ブッシュバックなど多くの動物たちの食物です。ゴリラもたくさんの草を毎日食べています。草が家畜に食べつくされてしまったら、こうした野生動物たちの食べるものが不足してしまいます。それに、牛や山羊たちが公園内で排泄したり、体を木々にこすりつけたりすると家畜に特有の病気が野生動物に感染します。ダニなどの寄生虫も伝染するでしょう。野生動物に大きな被害を与えかねません。

さらに、元狩猟採集民だったトゥワ人たちの不法活動も活発化しています。国立公園の高地部にはンタブナ、ミサリ、カスラという村があって、ここに 1970 年の公園設立の際からトゥワ人たちが居住しています。公園の境界にあって、わずかな土地を与えられて農業で生計を立てていくことが奨励されているのですが、なかなか畑仕事になじめず、密猟や薪採りなどに公園内に立ち入るようになってきたのです。ポポフでもトゥワ人たちを雇いあげてアートセンターや洋裁で新しい暮らしを図っているのですが、観光客不足でなかなか収入が得られていません。わずかにバサボセさんが中心になっているゴリラとチンパンジーの調査活動に従事してもらうのが精一杯です。とくにトゥワ人の若者たちは公園の歴史や保護の法律を知らず、不法活動をすることが増えているようです。

その対策として、ポポフは家畜を公園内に放牧している場所や密猟の現場へ地元の高校生たちを案内し、彼ら自らが書いた「もうこんなことはしないで！」というプラカードと密猟にあったゴリラなどの野生動物の頭骨を持ってデモンストレーションをしました。村人たちはきっと子供たちの願いを聞いてくれるだろうと願っています。

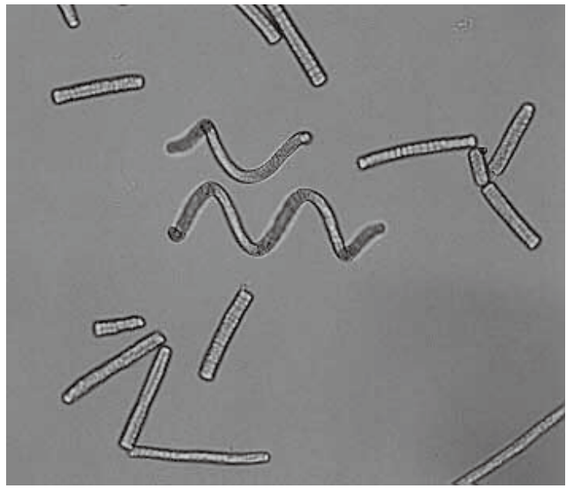
アンガ学校の生徒が密猟で犠牲になったゴリラと野生動物の頭骨を手にもつ

スーパーフードの養殖

ジョン・カヘークワ

昨年 11 月に、私は他のポポフのメンバー 2 人とイスラエルに遠征しました。それは、今スーパーフードとして世界に知られているスピルリナ（*Algae spirulina*）の養殖技術を学ぶためでした。スプルリナはクロレラの一種で水中に育つ植物です。多種多様な栄養素を含むスーパーフードとして、近年世界中で注目を集めています。体に不可欠な 5 大栄養素〈たんぱく質、脂質、炭水化物 (糖質)、ビタミン、ミネラル〉の他、食物繊維など、人間が健康のために必要としている成分すべてを含んでいます。WHO(世界保健機関) や FAO(国連食糧農業機関) でも高く評価されていますし、来る人口増加による食糧難への対策として「優れた未来食」とも言われています。

カフジ・ビエガ国立公園の周辺に暮らす人々は、人口の増加と度重なる耕作による土壌の悪化で作物の不足に悩んでいます。ポポフが開発した養殖池でこのスプルリナを増やせば、住民の栄養条件を改善できるかもしれません。私たちはまず、バサボセさんの働いている中央科学研究所の小さな養殖池にスプルリナを移植し、養殖を開始しました。スプルリナはとても成長が早く、約 2 週間で収穫できます。



スピルリナ (藻類) の顕微鏡写真　@ 1994 NEON, from Wikipedia, CC & GFDL licenses

まず、これは栄養不足に直面している子供たちに与えることにしています。実験は今のところ順調です。すでに、ポポフが経営するアンガ学校のあるミティ村に大きなプールを準備しています。将来はこの地域にスプルリナを普及させ、ポポフの事業にしようと考えています。

阿部知暁　画

活動報告

（２０１８年６月から２０１９年６月まで）

▼２０１８年

6 月 16 日　• NHK 公開講演「ゴリラに学ぶ人間らしさ」 山極寿一　京都府長岡京記念文化会館（長岡京市）
7 月 23 日　• ポポフバー　堺町画廊（京都市）
7 月 29 日　• 京都府保険医協会講演「ゴリラから見た人間の健康社会」 山極寿一　ホテルオークラ（京都市）
9 月 15 日　• 堺の文化を考える市民の会講演「ゴリラに学ぶ」 山極寿一　堺市総合福祉会館（堺市）
9 月 28 日　• 名古屋外国語大学創立 30 周年記念講演「ゴリラから学んだ人間社会の由来」 山極寿一　名古屋外国語大学（日進市）
10 月 6 日　• 名古屋市と京都大学との連携に関する協定」締結１０周年記念特別講演「ゴリラのなかにヒトを見た－進化の物語－」 山極寿一　東山動物園（名古屋市）
10 月 13 日　• 大谷大学開学記念式典記念講演「共感社会の由来と未来―ゴリラとともに考える」 山極寿一　大谷大学（京都市）
10 月 14 日　• モンキーキャンパス講演「ゴリラから見た AI 社会」 山極寿一　日本モンキーセンター（犬山市）
11 月 11 日　• こども本の森中之島設立記念連続講演会「ぼくはこうしてゴリラになった」 山極寿一　大阪市役所（大阪市）
11 月 17 日、18 日　• 第 21 回 SAGA シンポジウム　ポポフブース出店　東海大学・熊本市動植物園（熊本市）
12 月 16 日　• 柿衞文庫講演会「サルから学ぶヒトの社会性」 山極寿一　柿衞文庫（伊丹市）

▼２０１９年

1 月 13 日　• 新春フォーラム「ゴリラから学ぶ幸せな生き方」 山極寿一　ホテルニューオータニ（大阪市）
2 月 3 日　• 東京臨床心理士会研修会特別講演「人間家族の由来～ゴリラの社会から考える～」 山極寿一　国際医療福祉大学赤坂キャンパス（東京）
3 月 19 日　• 法然院夜の森の教室「ブータンからゴリラと幸福を考える」 山極寿一　法然院（京都市）
4 月 13 日　• 天体望遠鏡博物館セミナー「人類はどこから来てどこへ行くのか？」 山極寿一　天体望遠鏡博物館（高松市）
4 月 14 日　• 野生動物学のすすめ「ヒガシゴリラとコンゴの紛争鉱物　そしてわたしたち」 戸田恵美　京都市動物園（京都市）

催しのご案内

▼２０１９年

●ポポフバザー（ポポフグッズやアフリカの民芸品を展示・販売します）
2019 年 9 月 6 日～ 9 月 8 日　堺町画廊（京都市）

●第 22 回サガシンポジウム（アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い）
2019 年 11 月 16 日・17 日　日本モンキーセンター（犬山市）

会計報告

会計報告（2018 年 7 月～ 2019 年 6 月）

収　入		支　出	
昨年度よりの繰越金	2,179,053	ニュースレター印刷費	28,620
講演会・シンポジウム　カンパ	7,253	ニュースレター・ホームページ作成費	27,010
ポポフグッズ売上（現金）	77,000	ポポフグッズ材料費・制作費	6,233
寄付 (現金)	200,000	振替用紙印字代	1,102
売上・寄付（郵便振替）	1,015,514	郵送費	54,615
受取利子	8	ポポフへ送金	2,432,500
		次年度へ繰越金	928,748
計	3,478,828	計	3,478,828

ろうきん東海 NPO 団体等寄付システム、日本グレイトエイプス保護基金から寄付金をいただいています。

近刊案内

- 山極寿一・小川洋子著　『ゴリラの森、言葉の海』 新潮社
- 山極寿一・小原克博著　『人類の起源、宗教の誕生』 平凡社新書
- 酒井敏他著　『京大変人講座』 三笠書房
- 酒井敏著　『京大的アホがなぜ必要か―カオスな世界の生存戦略』 集英社新書
- 宮野公樹著　『学問からの手紙』 小学館
- 大石高典・近藤祉秋・池田光穂著　『犬からみた人類史』 勉誠出版
- 半谷吾郎・松原始著　『サルと屋久島―ヤクザル調査隊とフィールドワーク』 旅するミシン社
- 篠原徹著　『ほろ酔いの村―超過密社会の不病と平等』 京都大学学術出版会
- 今福道夫著　『おとなのための動物行動学入門』 昭和堂
- 長谷川真理子著　『世界は美しくて不思議に満ちている』 青土社
- 藤原辰史著　『給食の歴史』 岩波新書
- 永田和宏著　『知の体力』 新潮新書
- 河辺俊雄著　『人類進化論』 東京大学出版会
- クレイグ・スタンフォード著・的場知之訳　『新しいチンパンジー学』 青土社
- リアム・ドリュー著・梅田智世訳　『わたしは哺乳類です―母乳から知能まで、進化の鍵は何か』 インターシフト
- 島田周平著　『物語ナイジェリアの歴史―「アフリカの巨人」の実像』 中公新書
- 田付貞洋・佐藤宏明・足達太郎著　『アフリカ昆虫学―生物多様性とエスノサイエンス』 海遊社
- 今井一郎編　『アフリカ漁民文化論―水域環境保全の視座』 春風社
- 太田至・曽我亨編　『遊牧の思想―人類学がみる激動のアフリカ』 昭和堂
- 新井紀子・ぐっちーさん著　『日本を殺すのは誰よ！』 東邦出版
- 松本奈々著　『異見交論』 事業構想大学院大学出版部
- 豊田長康著　『科学立国の危機』 東洋経済新報社
- 山折哲雄著　『老いと孤独の作法』 中公新書ラクレ
- 平野丈夫著　『何のための脳？　AI 時代の行動選択と神経科学』 京都大学学術出版会
- 大澤真幸著　『社会学史』 講談社現代新書
- 佐藤卓己著　『流言のメディア史』 岩波新書
- 根津朝彦著　『戦後日本ジャーナリズムの思想』 東京大学出版会
- 出口治明著　『戦争と外交の世界史』 かんき出版
- エマニュエル・プイドバ著・松永りえ訳　『鳥頭なんて誰が言った？　動物の「知能」にかんする大いなる誤解』 早川書房
- J・M・クッツエー著・くぼたのぞみ訳　『モラルの話』 人文書院

ルワンダでのゴリラ・ツアーとジョン・カヘ―クワ氏との面会

戸田恵美

2019 年 4 月 29 日～ 5 月 8 日にルワンダを訪問し、ゴリラ・ツアーを体験し、現地 NGO の活動を調査するとともに、外務省の退避勧告のために訪問が不可能なコンゴ民主主義共和国の POPOF のメンバーとルワンダの国境の町で面会してきました。

ボルカン国立公園では、竹藪を鉈で払い急な山道を登ること 2 時間ほどでマウンテンゴリラと出会えました。ゴリラたちは、飼いならされた個体が放たれているかのようでレンジャーの「ぐむ～」が「来い」の合図なのかと思われるほど至近距離まで寄ってきました。シルバーバックは前を横切る際にレンジャーを殴るまねをし、アカンボウが観光客の衣服をつかむなどサービス（？）満点でした。樹上で戯れ、地上で腹ばいになってくつろぎ、ヒトを警戒する様子はありません。このような“ゴリラとの近さ”は SNS 上で拡散しているようです。また、毎年国をあげて行う新しく生まれたゴリラの名づけ祭や、個体についてのネット配信などルワンダは非常に観光戦略に長けてもいて、ゴリラ・トレッキングの参加費は US$1500（一人、観察 1 時間）と高額であるにもかかわらず世界中から観光客が押し寄せています。過剰な人付けによるストレスや人獣共通感染症などゴリラへの影響が心配になりました。

現地ではゴリラの保護活動を行う NGO のメンバーを訪ねました。ルワンダ・ウガンダ・コンゴの 3 か国と研究者が協働する IGCP のベンジャミン氏は、ゴリラ生息域の住民代表を集めて定期的な講習会を開き、レベニューシェア（ゴリラ・ツアーの収入から近隣住民への還元）の使い道など自治に関する意見の交換を行っていました。カリソケ研究センターのフェリックス氏はセンター初のアフリカ人代表であり、ダイアン・フォッシー博士の遺志を継ぎゴリラの研究および保護活動を行ない、世界に情報を発信し協力を働きかけることに尽力していました。他にも多くの NGO が活動し、マウンテンゴリラは常時モニターされています。ゴリラに国境はありません。私の訪れたアガシャグループは DRC のビルンガ国立公園内からもメスを得ているのだそうです。

ジョン・カヘ―クワ氏とバサボセ博士はカフジの最寄りの都市、ブカブ在住です。キブ湖越しにブカブの町並みを眺めて国境の町シャンググでお会いしました。

まず POPOF 日本支部から日本の支援で出来た図書館にフランス語の絵本を寄贈。鉛筆やボールペンなどの文房具も届けました。カヘ―クワ氏は、住民が生活に利用するためのバッファゾーンへの植林事業、POPOF-UK から届いたミシンでレンジャーの制服などを作る事業、イスラエル支部の支援で進めているスピルリナの栽培事業などに加えての低地部でのゴリラの調査とデータ収集に多忙を極めているそうです。先日はマラリアで入院されたそうで、60 歳に近づき次世代に活動をつないでいきたいが、DRC 東部では紛争状態が長引き、カフジではゴリラ・ツアーの観光収入が望めないため、継続的なファンドの設立が急務であるとのことでした。

バサボセ博士は、現在、大学教員・調査研究・ご自身の NGO 運営とやはりご多忙の様子でした。カフジは論文になっていない生態系の宝庫であるため研究対象としての可能性が高く、DRC における霊長類学の今後の発展を期待して欲しいとのことでした。NGO ではゴリラの糞から取り出した種子から苗を作り、とくにトゥワの伝統的な薬用植物を選別し植林しているとのことです。なお、バサボセ博士は、このあと 6 月に米国で開催されたナショナルジオグラフィックの NGO の集まりに、コミュニティーベースのゴリラ保全活動を行なっているとして招聘され、活動を発表しています。

ジョンさん（左）、バサボセさん（右）とともに

ゴリラの湿地利用についてカフジとムカラバを比較した論文が出版されました

山極寿一・バサボセ・カニュニ

この度、カフジでヒガシローランドゴリラを研究している私たちと、ガボン共和国のムカラバ国立公園でニシローランドゴリラを研究している岩田有史さん、安藤智恵子さんとの共著論文が、ケンブリッジ大学出版会から出版された Primates in Flooded Habitats（湿原の霊長類）という英語の本に掲載されました。その内容を簡単に紹介します。

カフジの湿原

標高 3000 メートルを超える高山地帯に住んでいるヴィルンガのマウンテンゴリラを除き、その他の地域のゴリラたちはすべてチンパンジーと共存しています。でも、生息域をさらに細かく見ると、共存域でも湿原にはほとんどゴリラしか立ち入らないことがわかってきました。湿原はゴリラの独占域なのです。なぜか？　その理由はまず、果実食のチンパンジーにとって湿原は果実がほとんど得られない場所であること。それから、樹木の少ない湿原は樹上性のチンパンジーにとって住みにくい場所だということです。では、ゴリラはなぜ湿原を好むのか？　それを 2 地域の長期調査の結果から導き出したのがこの論文なのです。

カフジのゴリラは年間約 15 平方キロメートルの範囲を動きますが、そのルートの 7％しか湿原は入っていません。でも、湿原の利用は一年を通してみられ、毎年行動域を変えますが、必ず湿地がある場所を選びます。湿地ではカヤツリグサの仲間の *Cyperus latifolius* の茎をよく食べます。また、湿地では地上にベッドを作って寝ますが、ここにはヒョウなどの地上性の肉食獣が侵入しにくく、地上で安心して寝られる場所だと考えられます。

一方、低地（海抜 50 メートル）で暮らすムカラバのゴリラは果実を日常的に食し、湿地や川辺林には果実が少なくなる時期に集中的に利用します。クワ科の樹木 *Milicia excelsa* の葉をよく食べます。ムカラバでもゴリラの行動域は 1 年間に約 15 平方キロメートルですが、年ごとにあまり行動域を変えず、決まった場所を繰り返し利用しています。ここのゴリラは水を恐れず、小川ならば平気で渡るし、雨期に増水すれば腰までつかって川を渡ることもあります。

両地域の大きな違いは、カフジのゴリラが草食的な採食戦略をとるのに対し、ムカラバのゴリラは果実食的な採食戦略をとるということです。草は動物に食べられて芽吹きを刺激される必要がありますが、一度食べられると回復するまで数か月時間がかかります。そこで、草食動物はいったん食べ荒らすと別の地域に移動し、数か月後にまた戻ってくることを繰り返しているのです。果実の少ない高地に生息するカフジのゴリラは草食動物に似た採食をしていて、そのために毎年のように行動域を変えるのです。

これにたいして、低地のムカラバでは果実が豊富になるので、一年の大部分を果実に依存して暮らすことができます。果実は植物が動物に食べてもらって種子を運んでもらう報酬ですから、いくら食べても植物は傷みません。しかも少しづつなるので、動物は繰り返しやってきて熟した実だけを食べていくのです。チンパンジーはこの採食戦略をとっていますが、ここのゴリラもよく似た戦略をとると考えていいでしょう。でも、果実が不足するとチンパンジーは分散して広く探し回るのに対して、ゴリラは群れでまとまって湿地や川辺林にやってきてもっぱら葉を食べて過ごすのです。その場所が毎年決まっているので、ムカラバのゴリラは年ごとに行動域を変えないのです。また、ここでも湿地はゴリラにとって地上性の肉食獣を避ける安全な場所だということがわかりました。

ムカラバの川にたたずむシルバーバック

この比較研究で、湿地はゴリラが好きな果実は少ないものの、重要な食物を提供してくれる、しかも肉食獣を避ける安全な場所であることがわかりました。チンパンジーとの共存域ではゴリラのほうが生息密度が高いことが多いのですが、これはチンパンジーの利用しない湿地にもゴリラが暮らしているせいでしょう。しかも、湿地はこれまで人間が利用してこなかったので、ゴリラの楽園として残されてきた可能性があります。近年は開発が進み、湿地が開墾されてヤシのプランテーションになる地域が増えています。オランウータンの生息地がそのいい例です。そうならないように、カフジでもムカラバでも湿地の重要性を訴えていこうと思っています。

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合　計
	13 歳以上	8-12 歳	8 歳以上	6-8 歳	3-6 歳	0-3 歳	
チマヌーカ	1	5	2	2	4	5	19
ボナネ	1	0	3	0	1	2	7
ムプングェ	1	0	9	0	4	6	20
ムガルカ	1	0	0	0	0	0	1
ナマディリーニ 1	1	3	6	0	6	4	20
ナマディリーニ 2	1	0	7	0	7	0	15
チブルーラ	1	0	6	3	0	1	11
ガニャムルメ	1	0	6	0	3	0	10
マンコト	1	2	10	1	3	2	19
ランガ	1	5	3	0	2	1	12
ムファンザーラ 1	1	3	3	2	1	4	14
ムファンザーラ 2	1	0	4	0	4	3	12
無　名	1	2	1	0	2	0	6
合　　計	13	20	60	8	37	28	166

カフジにおけるゴリラの近況

山極寿一

ボナネ集団は、チマヌーカ集団で 2003 年に最初に生まれたボナネというオスが率いる集団です。母親はムヒンドといいます。ボナネは 2016 年に 13 歳でシルバーバックに成長し、1 頭のメスを連れ出して父親のチマヌーカ集団と分かれて遊動しはじめました。最初はチマヌーカ集団の遊動域のなかで、父親と会うのを避けるようにして動いていましたが、だんだんと遊動域を広げて他の集団と出会うようになり、次々にメスが加入してきて今年までに 12 頭の集団になりました。そして、この 5 月 24 日に新しい赤ちゃんが生まれました。赤ちゃんはすぐに母親の乳首をくわえ、母親はいつも赤ちゃんを抱いて運んでいます。元気に育つようにみんなで見守っています。

ムヒンドと生まれたばかりの赤ちゃんゴリラ

負傷したボナネ

ところが数日後、ボナネは別の集団と出会い、その集団のシルバーバックと激しく衝突しました。戦いは朝から晩まで続き、ボナネは手や足、顔に無数の傷を負いました。幸い、致命傷ではなく、ゆっくり歩くことはできるようです。思い返すと、1989 年にボナネのおじいさんにあたるマエシェも、当時ムシャムカ集団を出て自分の集団を構えたばかりのニンジャと衝突し、激しく戦った末に胸に大きな傷を負い、数日間動けなくなったことがあります。このとき、数頭のメスがマエシェのもとを離れてしまいました。幸い、マエシェは回復し、そのおかげでチマヌーカたち息子も元気に育つことができたのです。

ボナネの傷はマエシェの時ほど重傷ではなく、メスもボナネのもとを離れる様子はありません。きっとまもなく元気になるでしょう。ゴリラの世界では、ときどきオスどうしの激しい衝突が起こります。戦いで死に至ることもあります。ボナネもこの試練を乗り越えて、立派なシルバーバックに成長してほしいものです。

他の集団は昨年と変わりません。昨年大きな変動があったガニャムルメ集団も安泰のようです。マンコト集団とランガ集団のブラックバックもまだ親元を離れていないようです。分裂したムファンザーラ集団の構成も変わっていません。安定期に入ったと言っていいでしょう。ムガルカはまだ一人暮らしを続けています。最近は地元の高校生や女性たちのグループがムガルカをよく訪問して、すっかり人気者になりました。あせらず、じっくりメスにアピールして自分の集団を作ってもらいたいものです。

これからも、ポポフはゴリラの動向をモニターして、その様子を皆さんにお知らせしていこうと思います。楽しみにしていてください。

ポポフ・グッズ

☆ビチブ・ムフンブーカ
絵はがきセット

（おまかせ５枚組）　**６００**円

☆ポポフ絵はがきセット

（おまかせ 10 枚組）　**１０００**円

☆ポポフエコバッグ

（厚手）**２５００**円
横 : 35cm、縦 : 持ち手を入れて 50cm、マチ付き

【ア】～【カ】の図柄をご指定ください

他にも図柄が選べるバラ売りの絵はがきやここに掲載できなかったグッズも用意しています。

「ポポフ ホームページ」のグッズページも是非ご覧ください。

ポポフグッズのページ

http://popof-japan.com/blog/?page_id=24

（2019 年のサンプル）

☆ポポフ 2020 年カレンダー

（予約販売 11 月頃配布）
１０００円

ポポフ日本支部では、ポポフのメンバーが作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は郵便局で**「青色」**の振り込み用紙にご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。 折り返し、グッズをお送りいたします。

口座番号：００８１０−１−９０２１７
加入者名：ポレポレ基金

郵便振替情報 QR コード ►

お願い：ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

連絡先：〒 606-8502　京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室
ポポフ日本支部

ウェブサイト

ポポフ日本支部の公式ウェブサイトには、ポポフの活動、ゴリラ、カフジ・ビエガ国立公園を紹介するページや、グッズの販売、ポポフニュースのバックナンバー閲覧ができるページがあります。また、ポポフニュースに連載されているコンゴの昔話は挿絵が原画のカラーになっています。

ポポフの活動をより広く世界の人々に知ってもらうために、英語版のウェブサイトがあります。ポポフのこれまでの歩みや現在の活動の様子、スタッフ、カフジ・ビエガ国立公園、ゴリラなどについて情報を発信していきます。また、このウェブサイトと並行してブログも開設しました。こちらではポポフの活動だけでなく、国立公園周辺の村や町に住む人々の息遣いが聞こえてくるような、日常的な出来事を記事にして載せています。海外のお知り合いなどにご紹介いただければ幸いです

河辺智弘（ポポフ英語版ホームページ担当）

ポポフのホームページ（日本語）

日本語サイト : http://popof-japan.com/blog/

ポポフの英語版ウェブサイト

英語サイト : http://www.polepolefoundation.org/

英語ブログ : http://www.blog.polepolefoundation.org/

ヒョウとシタトゥンガ

語り手：ムンゾンギ・ベンバ
挿し絵・訳：ふしはら のじこ

あるところに、とても商売上手なヒョウがいました。ヒョウはシタトゥンガ（アンテロープの一種）と同じ村に住んで、商売は街でしていました。

ヒョウが持っているヤギは１頭だけでしたが、シタトゥンガはたくさんのヤギを持っていました。

ヒョウはこう思っていました。

「シタトゥンガのやつはヤギをたくさん持っているが、兄貴分の俺は１頭だけだ。しかもそいつはオスだから子どもを増やすこともできない」

そこである日、シタトゥンガのところへ行ってこう言いました。

「おいシタトゥンガくん、俺は旅に出るのでしばらくヤギの面倒を見てくれないかい。この辺りは泥棒が多いからよく見張ってくれよ」

「ええ、いいですとも」

シタトゥンガは快く引き受けました。

ヒョウは旅から戻ると、シタトゥンガのところへ子どもを使いに出しました。

「弟分のシタトゥンガのところへ行って、ヤギを返してもらって来るんだ。俺のヤギはメスヤギを産んで、ヤギは２頭になっているからな」

ヒョウの子どもがシタトゥンガのところへ行くと、シタトゥンガは預かったヤギを自分のヤギと間違えないように、別の場所で世話をしていました。シタトゥンガはヒョウの子どもの話を聞くと、驚いて言いました。

「ばかな、君のお父さんが預けていったヤギはこのオスヤギだぞ。オスヤギが子どもを産んだりするもんか」

そんな訳で、いざこざが始まりました。

「おいシタトゥンガ、おまえは俺の弟分だから争いたくはないんだ。早いとこ俺のヤギと生まれた子どもをよこしな」

とヒョウは言いましたが、シタトゥンガはこれに応じる訳はありません。そこで、裁判をすることになりました。裁判の場には、あらゆる動物たちが集まって来ました。ヒョウは自分の言い分をとうとうと述べました。シタトゥンガも負けずに自分の言い分をみんなに話して聞かせました。

双方の話が終わると、動物たちは２匹から離れた場所に集まって相談しました。

「ヒョウが理にかなっていないのは明らかだ。でもそんなことを言ったら、みんなヒョウに殺されてしまうだろう。それに比べシタトゥンガは怖いやつではない。あいつはヤギをいっぱい持っているから、メスヤギ１頭ヒョウにやってもどうってことはない。これならシタトゥンガだけの被害ですむ」

誰もヒョウといざこざを起こしたくなかったのです。ところがカメとダイカーは反対しました。

「我々には鋭い牙も強い力もないが、公平な心もないのかい」

けれど動物たちは、ヒョウとシタトゥンガのところに戻ると、こう言いました。

「シタトゥンガお前が悪い。我々はヒョウのヤギが妊娠していたのも、子どもを産んだのも知っている。ヤギはオスだがメスヤギを産んだと認める。さあヤギを連れて帰るんだ」

「ええっ！そんなことが」

シタトゥンガは驚いて叫びましたが、仕方なくメスヤギとオスヤギを連れて来ました。その時ダイカーが飛び出して来ました。

「えーっ！おじさんか、おじさんが、おじさんがー」

「どうしたんだい、どうしたんだい？」

「おじさんが死にそうなんだ」

「なんで死にそうなんだい？」

「しらない間におじさんが妊娠してしまったんだ。こどもが産まれそうなのに、なかなか出てこないんだ」

ヒョウはびっくりして飛び上がりました。

「ダイカー、なんだって？」

「ほんとうだよ、おじさんが死にかけているんだ。陣痛が来ているのに子どもが出てこないんだ。どうすればいいか分からないんだ」

「おいダイカー、おまえマリファナでも吸ったのか？頭がおかしくなったのか？男が子どもを産むだって、どうやって妊娠するんだ、まったく」

そこへカメが出てきました。

「ヒョウさん、ほんとうですよ。ダイカーのおじさんは妊娠しました。子どもがなかなか産まれなくて、医者も手の施しようがないのです。もう死ぬだけです。ほんとうのことです。さあ一緒におじさんの様子を見に行きましょう」

ヒョウは頭を何度もたたいて言いました。

「ダイカーがなんだって、なんだって」

ダイカーは言いました。

「おじさんを見てごらんよ、私のおじさんを。私の母と同じ母から生まれたおじさんだよ」

ダイカーはなおも続けて言いました。

「理屈にあわないでしょう。道理は通さなくちゃいけない。さあ自分のヤギだけを取って、メスヤギはシタトゥンガに返しなさい」

ほかの動物たちも自分たちのしたことを恥ずかしく思いました。ヒョウは自分のオスヤギだけを連れて帰りました。

おはなしこれでおしまい。

POPOF ニュースに掲載した写真で特に記載が無いものはポポフ本部か山極寿一が撮影したものです
Copyright © 2019 Pole Pole Foundation, All Rights Reserved